

「多職種で考える嚥下障害と舌接触補助床（PAP）の臨床」

【中島純子先生】

「摂食嚥下障害と顎補綴」

歯の欠損が咀嚼機能の低下をきたし、口腔関連 QOL や ADL の低下に関連するのは周知のことと思います。摂食嚥下機能の低下と摂食嚥下障害、表現は似ていますが、後者は社会生活へも影響を及ぼします。摂食嚥下障害の原因疾患では脳血管疾患が多いですが、我々が対象とする口腔領域の疾患である頭頸部癌術後患者さんでは、歯、周囲の顎、舌などの欠損も伴うことがあり、摂食嚥下障害が後遺することも多いです。

機能障害にはリハビリテーションが行われますが、リハビリは残存している機能を上手く賦活するということと、代償手段を用いる方法があり、喪失した口腔内の器官を補う補綴、顎補綴治療は重要な代償手段です。本講演では顎補綴についての概要と、嚥下障害の基本を中心に解説したいと思います。

【西脇恵子先生】

「リハビリテーションの道具としての PAP について」

演者は、PAP の製作の臨床場面では歯科医師と歯科技工士の方々と協働をさせていただいている。PAP は患者の運動および感覚機能障害に対する代償手段であり、必要な患者においては社会参加になくてはならないものである。摂食嚥下障害のみならず、構音障害に対しても有効であることが多く、リハビリテーションの訓練道具としても使うことが可能である。リハビリテーションの専門家として、製作において、どのような点にアプローチしているかを紹介したい。

【宮本哲郎先生】

「舌接触補助床を用いたリハビリテーションにおける歯科技工士の役割と装置の製作方法について」

歯科技工士が舌接触補助床（PAP）を製作する際に重要なのは歯科医師、言語聴覚士が調整した形態を正確に再現することでしょう。そのために他職種との連携を密にし、装置の製作には工夫が求められます。本研修会では PAP の製作方法や材質置換、充実型 PAP の中空化などを紹介し、摂食嚥下療法における他業種との情報共有・連携、歯科技工士の役割について考えたいと思います。